

教材「水の東西」を見直す

ー論理的不整合から巧みなレトリックへの転換ー

山下 直

0. はじめに

高等学校の定番教材「水の東西」に関する先行研究の中には、本文の論理の展開に不整合な点があることを指摘する論考が少なからず存在する。一方、「水の東西」が評論として読まれることに対して、筆者の山崎正和自身は「全く間違い¹」と述べている。評論として書かれたものではないにも関わらず、論理の展開を緻密に吟味しその不整合な点を批判的に取り上げることが、「水の東西」の適切な教材化を妨げる要因となっていないか。

このような問題意識のもと、本稿では「水の東西」の論理的に不整合な点に着眼する教材分析は、教材としての特徴を十分に捉えたものになり得てはいないことを指摘し、これまでの教材化のあり方を見直す必要があることについて論じる。

1. 論理的不整合を指摘される「水の東西」

森田信義・葛原昌子(2004)は、「水の東西」の批評文を書くという授業実践を行っているが、その際「水の東西」について以下のような批判的指摘をしている。

筆者は「鹿おどし」に、水の流れと同時に時の流れを聞いており、それが「流れる水」「時間的な水」という「鹿おどし」の特徴につながっている。しかも、「感じさせる」という文末表現から、筆者の感性によってとらえられたものであることも明らかである。同様に「噴水」の特徴として挙げられた「空間的な水」についても、「空間に静止しているように見えた」という筆者の感性を根拠にして導き出したものである。²

¹ 山崎正和 (2015) p4

² 森田信義・葛原昌子 (2004) p86

「もし、流れを感じるだけでがたいせつなのだとしたら」という仮定条件を根拠としているにもかかわらず、仮定が仮定でないことの証明もしていない。したがって、仮定が成立しない場合、つまり「流れを感じるだけでがたいせつなのではない」立場を取るならば、結論自体の根拠がないということへの目配りはない。³

「鹿おどし」「噴水」という文章の核となる二つの水を鑑賞する仕掛けの特徴が、筆者の感性を根拠にして導かれていること、結論が仮定条件を根拠にしていることを挙げ、「水の東西」の結論が論理的な根拠に基づいたものとなっていないことを指摘している。その上で、次のようにも述べている。

しかしながら、読み手との意見の対立を極力排し、批判されることを回避するための「巧妙な仕掛け」によって、読み手はすんなりと筆者の考えを受け入れがちである。⁴

「水の東西」は論理的な根拠に基づいて述べられてはいないが、「巧妙な仕掛け」によって読み手が筆者の考えを受け入れてしまうので、その「巧妙な仕掛け」に目を向けることで批評する力を育成することができるというのが、森田信義・葛原昌子(2004)の立場である。だが先にも述べたように、「水の東西」を評論として読むことが「全く間違い」であるならば、感性や仮定に基づいて考えが述べられていることを特に問題視する必要はないように思われる。にもかかわらず、それらを論理的な不整合と捉え、それを隠す「巧妙な仕掛け」を見破ることが批判的に読む能力の育成につながると捉えるわけである。

このように「水の東西」の論理的に不整合な点を指摘する論考は少なからず存在するが、その中でも長沼行太郎(2018)の論考では「対比」に着眼した詳細な分析が行われている。そこで、次節からは長沼行太郎(2018)を中心的に取り上げ、「水の東西」の論理的に不整合な点がどのように指摘されているのかについて詳しく見ていくこととする。

³ 森田信義・葛原昌子(2004) pp.86-87

⁴ 森田信義・葛原昌子(2004) p87

2. 「水の東西」の論理的不整合

長沼行太郎(2018)は、その論考のねらいについて次のように述べている。

本稿では、評論教材を対象として、筆者の見解や論旨を正確に読みとる学習と同時に、文章中に使われている表現法と思考法に注目する学びを提案したい。(中略)ここでは長く教科書教材として学ばれている山崎正和の「水の東西」という文章をとりあげる。とくに、この文章でつかわれている「対比」表現について、解釈上の困惑や論理的に不整合と思われる箇所との遭遇をきっかけに読解と考察を深める学習の提案である。⁵

「水の東西」の対比に着眼した上で、「解釈上の困惑や論理的に不整合と思われる箇所」を指摘し、その部分をきっかけとして教材本文を批判的に吟味する学習を提示することをねらいとしている。本稿では、長沼行太郎(2018)が挙げている「解釈上の困惑や論理的に不整合と思われる箇所」のうち、特に「潜在的な対比構造⁶」に関わる指摘に注目する。例えば、以下のような点である。

ニューヨークの銀行に置かれた鹿おどしに人びとがくつろがないのは、どの国であろうと「銀行」という場所に置かれたからではないのか、あの長い間隔を「待つ」だけの気持ちのゆとりを、時間を争う金融の場所に求めるのは無理で、これは「東西」の、日本人と西洋人の感性の違いの問題ではない⁷

長沼行太郎(2018)は、読み手が上に示した論理的な不整合に気付かずに結論を受け入れてしまうのだとしたら、それは読み手の方で「潜在的な対比構造」を作り出し、それに沿って読み進めているからではないかと述べている。読み手の中に日本と西洋の対比というスタンスを土台とした「潜在的な対比構造」が作り出され、「長い間隔を『待つ』」ゆとりのない西洋人と、そのゆとりのある日本人という対比で捉えてしまうために、論理的な不整合に気付かないということである。

⁵ 長沼行太郎(2018) p46

⁶ 長沼行太郎(2018) p50,p52

⁷ 長沼行太郎(2018) p51

この「潜在的な対比構造」は、山下直(2016)で指摘した次の捉え方に通じる点がある。

本文には書かれていなくても、読み手の方で〈噴水は目で見て楽しむことを前提とした水の装置である〉という内容を補うことで、「空間的な水」から「目に見える水」を引き出すことに不自然さを感じなくなっている⁸

これは、「水の東西」の対比的な三つのフレーズのうち、最後に示される「見えない水と、目に見える水」について、本文には「噴水」が目で見て楽しむものであるとはどこにも述べられていないのに、文章の展開から読み手がそれを補うことで不自然さを感じなくなること

を指摘したものである。多くの読み手は、「見えない水と、目に見える水」の直前の段落に日本人が「形なきもの」を恐れないことが述べられていることから、それとの対比で西洋人は「形なきもの」を恐れる＝「形のあるもの」を求めると補い、ゆえに西洋人にとって水は造型する対象であると補うことで「噴水」に辿り着く。「噴水」はバロック彫刻と喩えられる「空間的な水」にほかならず、そこから「目に見える水」が引き出されるというわけである。本文に述べられているのは日本人が「形なきもの」を恐れないということのみだが、潜在的な対比構造から本文に述べられていない内容を

読み手が補い、「噴水」が「目に見える水」であることが了承される。

もちろん、山下直(2016)の指摘は論理的な不整合を伴わない自然な類推であり、長沼行太郎(2018)の指摘は論理的に不整合な類推であるという違いはある。しかしながら、いずれも読み手が本文に延べられていないことを補いながら文章の展開を追う点は共通している。「水の東西」を評論として読めば、長沼行太郎(2018)が指摘した箇所は確かに論理的に不整合であるということになるだろう。しかしながら、随筆として読むならば、それは巧みなレトリックと捉えることも可能なのではなかろうか。この点については、次節以降で詳しく述べる。

「見えない水と、目に見える水」は、「見えない水」に関して言えばやや唐突に示されているという印象は否定できない。この点については、山下直(2016)でも以下のように指摘した。

⁸ 山下直 (2016) p42

最終段落のポイントは「我々は水を実感するのに、もはや水を見る必要がない」という部分にある。通常の評論文ならば、ここまでの過程で日本人が水を実感するのに水を見る必要のないことが、根拠（もしくは論拠）に基づき導き出されていることが期待される。しかしながら、「水の東西」の場合は、最終段落の直前までに導かれていることは「鹿おどし＝水を造型しない」、「噴水＝水を造型する」という対比であり、水を見るか見ないかということについての議論や検証は本文中には見られない。⁹

これは、「見えない水と、目に見える水」の直前の段落では、水を造型の対象としない日本人の感性を「形なきものを恐れない心の現れ」と捉えることができるということしか述べられていないのに、それが急に「見えない」「目に見える」という違いに置き換えられることの唐突さを指摘したものである。山下直(2016)では、読み手がこの唐突さに疑念を抱かない理由についても、潜在的な対比構造を作り出す読み手が、本文に書かれていない内容を補うためと捉えている。具体的には、まず日本人が水を造型しないということとの対比から、西洋人は水を造型するということが導かれ、次に造型することから形が与えられた水を目で見て楽しむということが導かれ、最後に目で見て楽しむこととの対比から、見ないで楽しむということが導かれることになる。「造型する＝目で見て楽しむ」との対比から「造型しない＝見ないで楽しむ」が類推されるというわけである。（この類推が、文章の叙述にしたがったものとなっていないことは次節で触れる）

一方、長沼行太郎(2018)は山下直(2016)とは異なる切り口で、この部分を論理的に不整合な箇所として批判的に捉え、以下のように述べている。

「定まったかたちがない」もの（非定型）を「かたちなきもの」（無形）へと、論理の脈絡をはずれた一般化がおき、誤読が生じているのではないか、と思う。その結果、例えば、

「日本人のかたちなきものを恐れない心が鹿おどしをつくりだした」という短絡的な理解、または要約が生じる。これは大きな間違いだ。「自然に流れる姿が美しい」と感じる美意識が、鹿おどしのような

⁹ 山下直 (2016) p42

「からくり」をつくり出すはずがない。(中略)

この段落の論旨から、「日本人が水を鑑賞する行為の極致」をもとめるなら、それは、水の流れを人工的な仕掛けでせき止め、置き換える鹿おどしではなく、自然の流れを生かす「せせらぎ」であるという見解が出されてもおかしくない。¹⁰

「見えない水と、目に見える水」の直前の段落で述べられている「定まったかたちがない」もの(非定型)を「かたちなきもの」(無形)へと一般化してしまう点に、論理的な不整合が見られるという指摘である。

「定まったかたちがない」もの(非定型)を恐れないからといって、それをすぐに「見えない水」に置き換えてしまうのが唐突であることは既に指摘した通りである。ただ、山下直(2016)はそのつながりが読み手の類推によって補われると捉えるが、長沼行太郎(2018)は「定まったかたちがない」もの(非定型)を「かたちなきもの」(無形)へとすり替えることで、本文には述べられていない「見えない水」へのつながりを読み手が作り出すと捉える。

長沼行太郎(2018)は、「『かたちなきもの』とは、『定まったかたちはない』水などのことを縮約した言い回しである。非定型であって無形ではない¹¹」と述べ、「かたちなきもの」も「定まったかたちがない」ものもどちらも「非定型」を意味するとしている。ところが、それを読み手が「かたちなきもの」を「無形」を意味するものとすり替えて捉えてしまうことで、本来はないはずの「見えない水」とのつながりを見出してしまい、「日本人のかたちなきものを恐れない心が鹿おどしをつくりだした」という誤った読みが導かれる。この点に論理的な不整合があるとしている。

山下直(2016)と長沼行太郎(2018)のこのような違いを踏まえ、次節では「見えない水」の捉え方を整理することを通して、長沼行太郎(2018)の批判が必ずしも妥当なものとは言えないことを指摘する。

3. 「見えない水」の捉え方ー「せせらぎ、滝、池」への着眼

前節でみた長沼行太郎(2018)が指摘する誤った読みが、実際に生じている例を逆瀬川貴司(2013)に見ることができる。

¹⁰ 長沼行太郎(2018) p53

¹¹ 長沼行太郎(2018) p53

抽象化が進んで「見えない水と、目に見える水」となるが、どちらが「鹿おどし」でどちらが「噴水」か見失う生徒があれば、二つの「水」の並べ方が三か所とも「鹿おどし」→「噴水」の順とされていることを示す。必要に応じて「形が見えない水と、形が目に見える水。」と補わせれば、結論とも結び付けやすい。¹²

「見えない水と、目に見える水」を「形が見えない水と、形が見える水」に置き換えている。「形が見えない」は「無形」と同義であり、ここでは「見えない」を「無形」と捉えていることになる。だが、「かたちなきもの」は「非定型」なのであり、定まった形はなくても目には見える。それがいつの間にか「非定型」ではなく「無形」にすり替えられ、「無形」＝「形が見えない」と置き換えられてしまう。このことは、長沼行太郎(2018)が指摘するすり替えが、高等学校の現場のレベルでも起きていることを示している。「かたちなきもの」はあくまでも目には見えるので、それを「形が見えない」と置き換えてしまうのは誤った読みと言わざるを得ない。長沼行太郎(2018)が指摘する誤った読みは確かに生じているのである。したがって、前節で示した山下直(2016)の類推も「水の東西」の叙述にしたがった読みとはなっていないことになる。だが、このような誤りが生じるのは「水の東西」に論理的に不整合な点があるからではない。「水の東西」を叙述にしたがって丁寧に読めば、上に示したような誤った読みが導かれることはない。

では、どのように捉えるべきなのか。岸洋輔(2013)は「見えない水」について、以下のような捉え方をしている。

水の本質は「形なきもの」＝「形が定まらないこと」＝「変化すること」である。形は定まらないが、それは見える。

では、「見えない水」とは何か。水の本質が変化することであれば、その変化を知ることができれば、水は見えなくとも水の本質は表現されるのであるという次の形式段落を受けた言葉である。となれば、「水を鑑賞する行為の極地」とは、水の本質(＝変化)だけを捉えたものとなり、それが「鹿おどし」であるということになる。¹³

水の本質を「形が定まらないこと」つまり「非定型」と捉え、それ

¹² 逆瀬川貴司(2013) pp.54-55

は見えるものであることが明確に指摘されており、「無形」へのすり替えは起きていない。だが、「水の本質」を知ることができれば「見えなくても水の本質は表現される」とはどういうことであろうか。ここでは、水の本質を知るとなぜ水が見えなくても水の本質を表現することができるのかを説明しなければ、「形なきもの」から「見えない水」へのつながりを十分に説明したことにはならない。

では、どのように説明すればよいのだろうか。ここで着眼したいのが「せせらぎ」「滝」「池」である。「水の東西」の本文には次のような部分がある。

日本の伝統のなかに噴水というものは少ない。せせらぎを作り、滝をかけ、池を掘って水を見ることはあれほど好んだ日本人が、噴水の美だけは近代に至るまで忘れていた。

ここには「水を見ることはあれほど好んだ日本人」とあり、日本人も水を見て楽しむことが明確に指摘されている。

「見えない水と、目に見える水」の直前の段落では、日本人が「西洋人と違った独特の好み」を持っていることが述べられ、ここでは日本人と西洋人が明確に対比される。そのため、その対比をそのまま引き継いでしまうと、「日本＝見えない水＝鹿おどし」、「西洋＝目に見える水＝噴水」という図式が作り出され、「水を見る必要さえない」日本人と、水を目で見て鑑賞する西洋人という対比が短絡的に導かれてしまう。だが、上の引用部分にあるように、「水の東西」では日本人もまた水を見ることを好むことが明確に指摘されている。

これまでのところを整理すると、「噴水」「せせらぎ」「滝」「池」「鹿おどし」については、以下の表1のようにまとめることができる。

	水を見て楽しむ	水を見る必要がない
水を造型する	噴水	
水を造型しない	せせらぎ 滝 池	鹿おどし

（表 1：噴水、せせらぎ、滝、池、鹿おどしの特徴の整理）

¹³ 岸洋輔 (2013) p43

これを見れば明らかな通り、水を造型するかしないかという指標と、水を見て楽しむかどうかという指標は別々のものであり、「造型する／しない」という違いが、「見る／見ない」という違いにそのまま対応するものではないことがわかる。にもかかわらず、直前の段落で述べられている日本人と西洋人の対比を、「見えない水と、目に見える水」にそのままあてはめようとしてしまうため、「見えない水」について誤った読みが生じたり、十分な説明ができなかったりしてしまうのである。表1のような整理が念頭にあれば、そのような誤りは生じない。

日本人は「形がない」ということについて「西洋人と違った独特の好み」を持っている。それは、「積極的に、形なきものを恐れない心の現れ」とでも言うべきものである。このような感性を持つ日本人は、「人工的な滝」は作るが「噴水」は作らない。その理由は、「日本人にとって水は自然に流れる姿が美しいのであり、圧縮したりねじ曲げたり、粘土のように造型する対象ではなかった」からである。したがって、日本人は「噴水」は作らないが「せせらぎ、滝、池、鹿おどし」は作る。

日本と西洋という対比で捉えるならば、水を造型の対象としないのが日本であり、造型の対象とするのが西洋ということになる。したがって、まずは西洋の「噴水」と「せせらぎ、滝、池、鹿おどし」という分け方になる。その次に、日本の「せせらぎ、滝、池」と「鹿おどし」が、水を見ることを楽しむかどうかで分けられることになる。「せせらぎ、滝、池」は水を造型する対象としないが水を見て楽しむものであり、「鹿おどし」は水を造型する対象としないとともに水を見ることも必要としないものである。「鹿おどし」が「日本人が水を鑑賞する行為の極致を表す仕掛け」となり得るのは、「鹿おどし」だけが水を見ることを必要としないからなのである。

以上のことから、「噴水」と「鹿おどし」の対比だけに目を向けていたのでは、「見えない水」を正しく捉えることは難しいことが理解できよう。「見えない水」を正しく捉えるには、「せせらぎ、滝、池」に目を向け、まず水を造型する対象とするかどうかという指標で「噴水」と「せせらぎ、滝、池、鹿おどし」の違いを捉え、その後に水を見て楽しむかどうかという指標で「せせらぎ、滝、池」と「鹿おどし」の違いを捉えるという二段階の整理が必要なのである。

4. 「水の東西」の述べ方の巧みさー随筆としての面白さ

前節では、「鹿おどし」と「噴水」の対比だけではなく、「せせらぎ」「滝」「池」にも目を向けることで、「見えない水」を正しく捉えられることを指摘した。このことは、長沼行太郎(2018)が指摘する「かたちなきもの」を「非定型」から「無形」にすり替える誤読の要因が、「水の東西」の論理的不整合によるものではないことを示している。とはいえ、逆瀬川貴司(2013)に見られたように、「非定型」を「無形」にすり替える誤読が実際に起こっている以上、長沼行太郎(2018)の指摘を看過することはできないだろう。

重要なことは、長沼行太郎(2018)は「水の東西」を説得や論証を旨とする評論として読んでいるということである。評論として読むならば、読み手に「非定型」を「無形」にすり替えさせるような述べ方をしていることを欠陥と捉える立場もあり得るだろう。そう考えれば、先に指摘した山下直(2016)と長沼行太郎(2018)の見解の相違は、「水の東西」を評論として読むか、随筆として読むかの違いに起因していることになる。長沼行太郎(2018)のように、「水の東西」を評論として読むと論理的な不整合に見えてしまうことも、随筆として読むことで巧みなレトリックとして捉えることができる。そして、この巧みなレトリックこそ「水の東西」という文章の特徴にほかならない。

本稿2.において、ニューヨークの銀行に置かれた「鹿おどし」のエピソードが挿入されていることに対する長沼行太郎(2018)の指摘を紹介した。このエピソードが、日本人と西洋人の感性の違いを示す根拠とはなり得ないという指摘は妥当なものと言ってよい。

しかしながら、ここで重要なことは、この指摘が「水の東西」への批判として成り立つかどうかということである。山崎正和に、このエピソードを日本人と西洋人の感性の違いを示す根拠として示そうとする意図がどの程度あったのか。以下に示す山崎正和(2015)からの引用の限りでは、そのような意図は希薄だったと考えざるを得ない。

どの教科書もあれ(山下注「水の東西」のこと)を評論の部類に入れていらっしゃる。これは全く間違いです。あれは随筆なんです。評論というのはやはり結論が正確さを旨としていて論争可能な文章でなければならない。(中略)随筆はそうではない。思いつきの面白さ、その感想の面白さ。結論が仮に間違っても面白ければそれでいい、これが随筆なんです。「水の東西」という文章は、もし私があ

れを日本文明論、あるいは日本文化論として書こうとしたら、いっぱい隙があるんです。¹⁴

評論を「論争可能な文章」と位置付けるとともに、「水の東西」については「日本文化論として書こうとしたら、いっぱい隙がある」とも述べている。これが筆者である山崎正和本人の言葉であることには、重要な意味がある。「水の東西」は論争可能な評論として書かれたものではないのである。したがって、「水の東西」を評論として位置付け、論証の過程の緻密な検証を通して、論理的な不整合を指摘するような読み方は、「水の東西」の書き手の意図とずれた読み方になっていると言わざるを得ないことになる。先行研究が指摘する「水の東西」の論理的な不整合は、「水の東西」を論争可能な評論として読もうとするために欠陥に見えるのであって、随筆として読めばむしろ巧みなレトリックとして捉えるべきものであると言えよう。

「水の東西」の面白さは、「鹿おどし」を「日本人が水を鑑賞する行為の極致を表す仕掛け」と捉えるものの見方にある。「極致」と言うくらいだから、それは他の「水を鑑賞する行為」には見られないものでなければならない。そのことを同じく日本人が作った「せせらぎ」「滝」「池」との違いで示しているわけだが、それだけで「水を見ることを楽しむ」と「水を見る必要がない」との違いをわかりやすく示すのは容易ではない。そこで、西洋の「噴水」を持ち出すことで「形なきもの」を恐れない日本人独特の感性について述べ、その中でも「鹿おどし」の「水を鑑賞する行為」には「せせらぎ、滝、池」にはない「水を見る必要がない」という側面があることを指摘し、それこそが「極致」と言えるのではないかということを述べているのである。

以上のことから、「水の東西」は「噴水」への着眼が大きな効果を挙げていると捉えることができる。これは、国語科の学習において、対比とはどのような表現方法かを考えるよい手がかりともなる。対比について、長沼行太郎(2018)は以下のように述べている。

「対比」には、対比する両者を平等に扱うのではなく、一方を強調するためにつかう、いわば修辭的対比とでも呼ぶべき用法がある。¹⁵

¹⁴ 山崎正和 (2015) pp.4-5

¹⁵ 長沼行太郎 (2018) p50

長沼行太郎(2018)はこのような対比について「潜在的な二項対立の文脈が生成されることがある¹⁶⁾」とし、読み手が「水の東西」の論理展開に対して慎重に吟味することを妨げる要因となっていると指摘する。「水の東西」の対比が「潜在的な二項対立の文脈」を生成させるという指摘は確かにその通りかもしれないが、それが論理展開に対する慎重な吟味を妨げる要因として捉えられてしまうのは、「水の東西」を論争可能な評論として読もうとするからにほかならない。

「水の東西」の対比を「一方を強調するためにつかう、修辭的対比」と捉えることに異論はない。このような対比は評論においては避けられるべきものであるかもしれない。しかしながら、「水の東西」を相手の共感を引き出すことをねらいとする随筆として読めば、このような対比が効果的に機能するものであることを学習する恰好の機会となり得る。

このように考えれば、ニューヨークの銀行に置かれた「鹿おどし」のエピソードも、読み手に対するわかりやすさを優先させたものと捉えることもできるだろう。もちろん、このエピソードが最適なものかどうかを吟味する余地はあるかもしれない。しかしながら、始めから論理的な不整合があるという立場でアプローチするのではなく、筆者がこのエピソードを挿入した意図を文章の展開に沿って考えていくことが必要ではなかろうか。「水の東西」は説得や論証を目指す評論ではなく、読み手の共感を引き出すことを目指す随筆である。多くの読み手の共感を引き出すというねらいに照らして、このエピソードの挿入がどのように機能しているかを考えさせることが、随筆の読み方としてはふさわしい。仮に、その過程で論理的な不整合を指摘する学習者がいれば、その点を評価すべきであることは言うまでもない。

さて、最後に「流れる水と、噴き上げる水」「時間的な水と、空間的な水」「見えない水と、目に見える水」という三つの対比的なフレーズの効果についても触れておきたい。これらは、「鹿おどし」と「噴水」の特徴を象徴的に示したフレーズであるが、筆者が最も言いたかったのは、「鹿おどし」を「極致」と位置付ける「見えない水」であると考えられる。このフレーズの「鹿おどし」に該当する部分は「流れる→時間→見えない」、「噴水」に該当する部分は「噴き上げる→空間→目に見える」であり、それぞれが連想ゲームのようなつながりになっ

¹⁶⁾ 長沼行太郎(2018) p50

ていることがわかる。流れるものと言えば時間であり、時間は目に見えない。噴き上げるためには空間が必要であり、空間にあるものは目に見えるものである。このつながりが、「見えない水」の唐突さに違和感を抱かせにくくする効果を発揮していると考えられる。

「見えない水」とは、「鹿おどし」の「一つの音と次の音との長い間隔を聴く」鑑賞の仕方を踏まえたものである。「一つの音と次の音との長い間隔」とは、「鹿おどし」が「こおん」と音を立ててから次の音を立てるまでの何事も起こらない長い静寂の時間である。その何事も起こらない長い時間に、「『鹿おどし』は我々に流れるものを感じさせる」と述べられている。何もないところに「流れてやまないものの存在」を感じるのである。そして、それこそが「見えない水」の正体にほかならない。水を見ないのではなく、「見えない水」をそこに感じているのである。

「水の東西」は二千字程度の分量で述べられている文章である。「見えない水」とは非常に抽象的、観念的であり、二千字程度の分量でわかりやすく説明することは至難の業であろう。そのため、山崎正和は、「見えない水」の正体を真正面から説明するのではなく、「噴水」を持ち出したり、銀行のエピソードを挿入したり、三つの短いフレーズを用いたりして、読み手に多くの部分を託す形で共感を引き出そうとしたのである。このような工夫を、論理的な不整合をごまかすための巧みな仕掛けと捉えることもできるかもしれない。しかしながら、それは「水の東西」を説得、論証を目指した評論として読む場合である。読み手の共感を引き出す随筆として読めば、それらは巧みなレトリックとして捉えられ、効果的な表現に対する認識を深める学習につながる事が期待できるのである。

5. おわりに

本稿では、「水の東西」を評論ではなく随筆として読むことで、先行研究が指摘している論理的な不整合の多くを、読み手の共感を引き出す巧みなレトリックと捉え直すことができることを指摘した。

平成30年版高等学校学習指導要領の国語科の各科目における「読むこと」の「構造と内容の把握」に該当する指導事項は、その全てが「文章の種類を踏まえて」という文言で始まっている。高等学校では「文章の種類を踏まえて」読むことがどの科目においても求められているのである。文章の種類を踏まえるとはどのようなことかについて、

学習指導要領解説を見ると、必履修科目の「現代の国語」では「それぞれの文章の特徴を捉えた上で読むことの対象とするということ¹⁷⁾」と述べられており、同じく必履修の「言語文化」では「対象となる文章が、これらのどれに属し、どのような特徴をもっているかを把握しておくこと¹⁸⁾」と述べられている。いずれにおいても文章の特徴に注目することが指摘されている。

これに従えば、「水の東西」を読む場合にも文章の特徴を捉えた上で読むことの対象とすることが求められていることになる。「水の東西」の論理展開を緻密に分析すれば、先行研究が指摘するような論理的な不整合は確かにあるかもしれない。しかしながら、その読み方は、少なくとも平成30年版学習指導要領が求めているものではない。論理的な不整合を前提にした指導は、「水の東西」という文章の特徴を捉えた指導にはならないからである。「水の東西」はレトリックの妙味を味わい、効果的な表現についての認識を深める学習に適した教材として、その価値がもう一度見直される必要がある。

平成30年版学習指導要領が告示され、高等学校の国語科の指導を見直すことが求められている。「水の東西」についてもこれまでの教材化の在り方を再検討すべきであろう。

【引用文献】

- 岸洋輔(2013), 国語の授業と評論の読み解き－「水の東西」に触れて－, 日本語学, 第32巻第15号, pp.34-44
- 逆瀬川貴司(2013), 神奈川県立高校の組織的な授業改革と定番教材『水の東西』, 日本語学, 第32巻第15号, pp.46-56
- 長沼行太郎(2018), 文章を通して思考を鍛える－「水の東西」、対比、逆説、ベルクソン, これからの国語教育, No.1, これからの国語教育研究会, pp.46-65
- 森田信義・葛原昌子(2004), 批評を生み出す評論文指導の実践, 広島大学大学院教育学研究科紀要第一部, 第53号, pp.83-92
- 山崎正和(2015), 〈インタビュー〉私の国語教育論, 国語教室, 第101号, 大修館書店, pp.2-7
- 山下直(2016), 「水の東西」(山崎正和)は評論教材か, 教育研究ジャー

¹⁷⁾ 高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説国語編 p99

¹⁸⁾ 高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説国語編 p127

ナル, Vol.9 No1, 文教大学大学院教育学研究科, pp.41-44

* 「水の東西」の本文は大修館書店「精選 国語総合新訂版」(平成28年3月文部科学省検定済)によった。

(本学教授)